

将来像

自然・歴史・ひとが光り輝く
だれもが住みよい

県央の
中核都市

新市を創造する3つの力

魅力・活力・協力

まちづくりの基本方針

- 地域資源のネットワークによる活発な産業づくり
産学官連携等による大田ブランドづくりなど
- だれもが住みよく、安心・やすらぎを感じる生活づくり
子育て支援の充実（保育料軽減等）など
- 県央の中核都市にふさわしい、快適な基盤づくり
情報通信基盤の整備・活用（CATV開設等）など
- 石見銀山をはじめとする歴史文化をいかした創造的な人づくり
石見銀山遺跡の保全・活用など
- 自然との共生や循環型社会を目指す生活環境づくり
省エネルギー・リサイクルの推進など
- 参画と協働によるまちづくり
行財政改革の推進、協働によるまちづくりの推進

大田市総合計画を 策定しました

石見銀山遺跡をシンボルに
新たなまちづくり

大田市では、このほど総合計画が策定され、今年4月から新たなまちづくりがスタートします。

総合計画は、少子高齢化や過疎化の進展、いまだ低迷を続ける地域経済など、当市を取り巻く社会経済情勢に的確に対応し、将来の大田市をどのようなまちにしていくのか、また、そのために必要な事業や施策など、これからのまちづくりの方向性を示すものです。

計画期間は、平成19年度から28年度までの10年間。今年

夏に世界遺産登録が見込まれる「石見銀山遺跡」を市のシンボルとして、さまざまな地域特性を活かしながら、だれもが住みよい県央の中核都市を目指します。

新大田市を創造するために必要な「魅力」「活力」「協力」の3つの力を有機的に連携させ、さらに、若者定住の促進を念頭に産業振興と子育て支援を柱とするまちづくりの基本方針に基づき、住民との協力による大田市らしい個性と活力にあふれる新しい「まちづくり」を展開していきます。

5年前、大森町に居を構えていた石見銀山附地役人が天保3年（1832）に書いた日記に出会いました。今回は、その一つを紹介します。

古文書にふれる

富山の薬売りを一例として

「七月二十六日 越中高田薬屋清九郎罷越／去卯年分薬代／錢五百拾七文相払／残薬入替致置候事」。現代文に直すと、「越中高田薬屋高田の薬屋である清九郎がやって来て、去年預けてもらっていた薬のうち使用した分の代金として錢517文を支払い、残った薬は入れ替えていった」となります。

幼かった頃の楽しい思い出がよみがえりました。大きな柳行李を背負った薬屋さんが年に1度、我が家に来てくれました。祖父が置き薬の箱を運び出すと、薬屋さんはこの1年の間に飲まれた薬を勘定し補充するとともに、残った古い薬を行李の中の新しい薬と差し替えていました。四方山話が交わされるのを聞きながら、薬屋さんが早く色とりどりの風船を取り出してくれなにかと、わくわくしたものです。

さて、富山で家庭配置薬というシステムができたのは1700年代初頭。石見地方が懸場（かけば）と呼ばれる売り薬屋が回る地域になったのはさほど遅くはなかったと思われれます。また得意先の薬の種類や量とその支払明細、家族構成や健康状態に

話を前述の日記に戻しますとこの日記は、銀の産出量が減ってきていることへの対処、金銭のやり繰りや年中行事など興味のつきない話題も豊富で、折を見て読み返しています。そうしているうち、これは後世へ残すことを意識して記されたものではないかと気が付きました。

最近、古文書を読むことに興味を覚える方が増えています。古文書に限らず、学習意欲や創造力をかきたてる歴史資料が、どこかに眠っていたり無意識に捨て去られたりすることがないよう心がけ、また適切に資料化されることで情報を共有できたらと思っています。

市でも熊谷家文書など調査研究を進めています。石見銀山の歴史を学び触れる機会も増えることとなります。

シリーズ新石見銀山 ⑤

（写真：薬箱おまけの風船は紙からゴムに変わっていった）

